

## ワタルと姉の「理由」をめぐる夏休み

### 第三話

ふいに、おれのお腹が大きな音を立てたために、おれと姉ちゃんとの理由をめぐる議論(?)は一時休戦になった。今晚は母ちゃんも父ちゃんも仕事でおそくなるから、おれと姉ちゃんの晩ごはんをおれが作らないとならなかった。おれのお腹の音を聞いた姉ちゃんが「私ももうお腹空いてきたな」と言ったから、いつもよりちょっと早いけど晩ごはんを作ることにしたんだ。

食べ終わって、姉ちゃんが皿を洗っているとき、ふとこんなことを言った。

「理由って、英語で「reason」って言うのよ」

りーずん？ そのひびきを聞いて、どういうわけか平泳ぎしてるときに頭にかんた。足で思い切り水をかいてから、すーっと静かにのびているあのときの感じ。

「さらにね、この「reason」という英語は、理性という意味でもある」

皿を全部洗い終えたようで、姉ちゃんが水を止めた。リビングを満たしていた音の一つがなくなつて、耳のあたりが軽くなったような感じがする。代わりに、庭のコオロギの鳴き声が生きていくことになる。

「理性というのは、人間が人間らしい自由な未来をつくるために必要な力なんじゃないかなって、私は思ってる。これがなければ、わたしたちは取り巻きの現実だけにしばられて、とても窮屈きゆうくつな世界で生きていかなければならない」

「理性」という言葉なら、おれも知ってる。学校でも、本でも、テレビでも、マンガでも、ユーチューブでも、耳にすることはいくらでもあるからね。けど、それがどういう意味かはあんまりよくわからない。あ、でも前に国語のテストで「理性的」の対義語を答える問題があつて、おれ正解してたっけ。そうだ、たしか答えは――

「理性があるから、わたしたちは目に見えない将来を思い描いて行動したり判断したりすることができる。感情や本能の命令にしたがうだけでない、わたしたちのあるべき姿を目指して。」

そう言うと、姉ちゃんは冷凍庫からスーパーカップ超バナラを出してきて、テーブルについた。おれの方を見てちょっと口をとがらせて、「なによ、文句ある？」と言いなながら。

「でもね、おいしいとか、好きとか、そしておもしろいとか、そういうのは感情よね」

姉ちゃんはスーパーカップの一口目を口に入れた。

「感情と理性はさ、対極にあるものなの。おたがいに干渉かんしょうしない。だから理性は感情にしばらく関係なく、自然とわきあがってくるものでしょ、感情ってものは。理性は感情が生まれること自体を、おさえることはできないのよ」

口からアイスがこぼれるのをふせぐために下あごを動かさないようにして話すのしゃべり方は、話している内容にぜんぜん似合わなくて、すごくおかしい。

「感情は理性が管理するところのものじゃないのよ。ある感情が生まれたことに理由をつけようとするということは、てきようはんい理性の適用範囲にないものに理性を働かせようとするということ。そんなことしたって、くう理性が空を切るだけに決まってる」

そのときふと、おれも無性むじょうにアイスが食べたくなっていたのに気付いた。姉ちゃんが食べてるのを見てつられちゃったんだね。それで、おれはちょっとあることを思い付いて聞いてみたんだ。

「姉ちゃんがアイスを食べてるのを見てさ、おれも食べたくなった。これってさ、おれの『アイスを食べたい』っていう感情の理由が、『姉ちゃんがアイスを食べるのを見てたから』ってことになるんじゃないか？」

そう言うと、姉ちゃんはスプーンをカップの縁ふちに置いた。そして、人差し指をあごにあてて考えこみ出した。もしかして、おれ、初めて姉ちゃんを言い負かした？

「確かに、それはするどい指摘だわ。良いところを突いてる。でも、厳密げんみつに考えれば、それは感情が生まれたきっかけというべきであって、理由であるとは言えないんじゃないかな」

「きっかけ？ 理由と、どちらがうの？」

「うーん、そうね……。確かに、この二つはとてもよく似てるから混同されるのも無理ないと思う。日本語ではきっかけも『くから』という言葉で表現され得るし。でもやっぱり、『おれがアイスを食べたくなくなった理由は、姉ちゃんがアイスをおいしそうに食べていたことだ。』って、なんか変じゃない？」

その違和感いわかんの内実を言葉にするのはすごく難しいんだけど……」

姉ちゃんは手の位置をあごほおから頬に移してうつむいた。

「なにそれ、説明になってないじゃん。おれ、べつに変だと思わないけど」

おれがそういうと、少し間をおいて姉ちゃんが視線を上げた。

「理由と言うと、その理由と、それによって引き起こされることに必然的なつながりがあるように聞こえる。でも、きっかけにはそういうことがない。いまはたまたまあんたがアイスを食べたくなったけれど、私がアイスを食べていればいつでも必ずそうなるわけじゃないでしょ？ なんとなくか、理由は内なるつながりだけど、きっかけはたまたま手をつなぐだけってところかな」

姉ちゃんは自分の考えの道筋を一步一步進むようにしてそう言った。最後の方は、その歩みに自信を持てたような口調だったけれど、おれは姉ちゃんの言いたいことがあまりよくわからなかった。いや、わからなかったんじゃないかって、納得できなかつたと言っべきかな。

「きっかけだけじゃなくて、目的なんかもそうよね。日常のレベルでは『くから』という言葉を使って表現できるから、理由との見分けがつけにくい。たとえば『医学部に行くために金がいる』というのを

『医学部に行くからお金がある』と言ってもいい。でも、この『くから』が、目的を表しているのか理由を表しているのかで、だいぶ話が変わってくるわ」

「ああ、目的なら、将来の話をしているようだけど、理由だとしたら、医学部に行くことがもう決まってる、あわてて金を集めてようとしている感じがするね」

「ふふ、そうね。普段「くから」という言葉でいっしょくたに言い表せてしまうからこそ、私たちは気をつけて見分けなくてはならないと思うの。理由と、目的やきっかけを。あんたも、読書感想文を書くときに気をつけなさい。自分が書くこうとしているのが、理由なのか、目的なのか、それともきっかけなのか」

ドクシヨカンソウブン……、その言葉を聞いたしゅんかん、おれはビクツとした。そうだった、こうして姉ちゃんと理由をめぐる話をしているのは、もとはといえばおれの読書感想文が始まりだったんだ。

「そしてもう一つ、あんたが考えなきゃいけないのは、『理由を書く意味があるかどうか』だったよね。どう、ここまで私と話してきて、考えはまとまった？」

そうだ、姉ちゃんさっきそんなこと言ってたっけ。

まあでも、たしかに、「本がおもしろかった」とおれが感じたことに対して、理由なんてつけようがないのはわかった気がする。この感情は、シェフの料理がおいしいとか、姉ちゃんがジュンくんのことが好きだとか、ユウジはおれの大好きな親友だとかっていうことと同じように、ただひたすら心の中にある感じなのであって、どうしてその感じがあるのかなんて理由はつけられないと思う。

でもさ、そうすると一つとってもズイことがあるんだ。それは、おれが読書感想文を終わらせるということにとって非常に大きな問題だ。

そう考えていると、姉ちゃんが言った。

「あんた、『理由を書く意味がないことについては納得したけど、もし理由を書かないことにしたら、どうやって字数をうめたらいいの?』って顔してるわね?」

どきっ。さすがわが姉。凶星です。

「わたしたちは感情に理由をつけられないけど、その感情の詳細しょうさいを明らかにすることならできるとよ。たとえば、わたしはスーパーカップ超バニラの、濃厚なだけどしつこすぎないバニラの風味が好

き。天体望遠鏡でのぞいた月みたいな表面を、最初にスプーンですくうときの感覚にぞくぞくする。こんなふうには、このアイスの好きなところを語れるわ。

それと同じように、あんたも本を読んで抱いた『おもしろかった』という感情について、とことん詳しく語れば良いと思う。何かおもしろかったのか、登場人物のどこが気になったのか、その場面を読んだときに自分がどんな感覚をもったり、体が反応をしたりしたのか。そういうことを語彙の限りをつくして語れば良いと思うの」

そういうと、姉ちゃんは席を立ち、キッチンでスプーンとアイスのカップを洗った。また少しのあいだ水道の音がリビングを満たして、それがやむと外のコオロギの声がもどってくる。

姉ちゃんは「まあ、それが一番大変かもしれないんだけどね」と言い捨ててリビングを出て行った。それと同時に、玄関を開ける音がした。母ちゃんが帰ってきたらしい。「おかえりー」「ただいまー」という姉ちゃんと母ちゃんのやりとりが聞こえて、リビングの窓から玄関におかかって、涼しい夜風が通り過ぎた。

おれはかべのカレンダーを見た。夏休みのおわりまであとわずか。はたして、おれは読書感想文

をぶじに書き直せるだろうか。

はあ……、だから姉ちゃんなんかに見せるのはいやだったんだよなあ。

(了)